

日本語の程度をあらわす助詞について

～ホド、クライの意味と用法～

言語学・応用言語学専攻

1 LT02073E

平成 14 年入学

須川 友美

平成 18 年 1 月提出

目次

0. はじめに.....	1
1. 様々な用法	2
1.1. 用法の分類	2
1.2. 数量の用法	3
1.3. 最上の用法	3
1.4. 同程度の用法	4
1.5. 非常の用法	6
1.6. 比例の用法	7
1.7. 軽視のクライ	8
2. 先行研究.....	9
2.1. 佐々木(1996).....	9
2.2. 益岡・田窪(1992).....	10
3. 指示代名詞コレ	11
3.1. コレホド、コレクライの用法.....	11
3.2. 順接タイプ	12
3.3. 名詞修飾タイプ	13
3.4. 逆接タイプ	14
3.5. 感嘆タイプ	15
4. まとめ.....	15
参考文献.....	18

要旨

本論文では程度を表す助詞ホド、クライについての考察を行った。これまでホド、クライが違った性格を持つことについては多くの先行研究で述べられてきたが、その使用制限などについての細かい研究はなされていない。ここではホドには強調・感嘆の意味、クライには同程度と軽視の意味があり、その性格の違いが使用制限に関係しているという立場で各用法の考察をしていく。その中で、最上の用法など、ホド、クライどちらも使用可能な用法でも、ニュアンスの違いが生じることがわかった。同程度の用法においてはホドは述部に肯定の形をとることができないことがわかった。また、その他指示代名詞コレに接続する形についても考察を行った。

0. はじめに

ホド、クライはどちらも程度をあらわす際に用いられる助詞であるが、用法によってそれぞれ使用できる場合と、できない場合とがある。次の例を見てみよう。

- (1) a. 私は世の中で虫ほど嫌いなものはない。
b. 私は世の中で虫くらい嫌いなものはない。
- (2) a. 君がこれほど冷たい人だとは思わなかった。
b. *君がこれくらい冷たい人だとは思わなかった。

(1)はホド、クライどちらも使用可能な例文、(2)はホドが使用可能であるがクライは使用できない例文である。どちらも程度をあらわす用法であるのに、なぜ(2)ではクライが使用できないのだろうか。それにはホド、クライそれぞれの持つ異なった性格が関係していると考えられる。次の例文を見てほしい。

- (3) a. あれほどの美人はなかなかいない。
b. あれくらいの美人はよく見かける。

どちらも容認可能である。しかし(1a)と(1b)とでは意味的な違いはそれほど表れていないのに対して、(3a)と(3b)とではホドもクライもどちらも「美人」にかかっている点では同じであるのに、文全体の意味が違うだけでなく、「あれほどの美人」「あれくらいの美人」自体に意味的な違いが大きく表れている。例えば(3a)のように「あれほどの美人」といった場合、何を想像するだろうか。おそらく普通の美人ではなく、ものすごく美しい人をイメージするのではないだろうか。それに対して、(3b)のように「あれくらいの美人」と言うと、「ものすごく美しい人」ではなく、「あの程度の美人」という、たいしたことない美しさのニュアンスが表れる。

このことから、程度をあらわす助詞ホドには強調の意味が、クライには同程度や軽視の意味がそれぞれあり、文脈において程度を強調したいときにはクライは使用できないと考えられる。

本研究ではこの仮説をもとに様々な例文、用法において考察を行い、ホド、クライの使用条件について考えていきたい。

1. 様々な用法

1.1. 用法の分類

前節の例文を見てもわかるように、ホド、クライを使用した例文の形は様々である。本節ではその例文を用法ごとに分類し、それぞれの用法についてホド、クライの使用制限を考察していきたい。

まず、いくつか例文を見てみよう。(それぞれの容認可能性については各節で詳しく見ていくため、ここでは省く。)

(4) 数量の用法

- a. ここから大阪までだと、4時間ほどかかる。
- b. ここから大阪までだと、4時間くらいかかる。

(5) 最上の用法

- a. 世の中で虫ほど嫌いなものはない。
- b. 世の中で虫くらい嫌いなものはない。

(6) 同程度の用法

- a. *カッコウはカラスほど大きい。
- b. カッコウはカラスくらい大きい。

(7) 非常の用法

- a. 君の気持ちは痛いほどわかる。
- b. 君の気持ちは痛いくらいわかる。

(8) 比例の用法

- a. 食べれば食べるほど太る。
- b. *食べれば食べるくらい太る。

(9) 軽視の用法

- a. *それほどのこと気にするな。
- b. それくらいのこと気にするな。

(4)~(9)の例文はそれぞれ違う用法の例文である。(4)の例文は、ホド、クライが数量名詞を補足成分としてとるもの、(5)の例文は、「名詞{ホド/クライ}~な名詞はない」という形で最上の意味を表すもの、(6)は同程度の意味を表すもの、(7)は「痛い」など

の、非常の状態を補足成分としてとるもの、(8)は「~レバ~」の形で比例を意味するもの、(9)は「たいしたことではない」「とるに足りない」などといった軽視の意味を表すものである。次節では、この分類に基づいて、用法ごとに詳しい考察を試みる。

1.2. 数量の用法

- (10) a. あの角を曲がって、あと50mほど歩けば我が家です。
- b. あの角を曲がって、あと50mくらい歩けば我が家です。

- (11) a. このお菓子は全部で200gほどのバターを使う。
- b. このお菓子は全部で200gくらいのバターを使う。

(10)や(11)の例のように、「50m」、「200g」など具体的な数や量に接続し、その程度を表す用法を「数量の用法」と呼ぶことにする。この数量の用法においては、ホドもクライも使用が可能である。

この数量の用法においては「1枚」「1個」などの最低基準の数字にはホド、クライが接続することができないことが高橋(2005)によって指摘されている。しかし、(12)のような場合にはクライのみが使用可能で、また「一つ」という最低基準の数字にも接続できる。

- (12) a. *一つほど食べたってわからないよね。
- b. 一つくらい食べたってわからないよね。

これは、この例文が数量の用法というよりは、「多くあるものの中からたった一つくらい」という、「一つ」を大した違いとしない、「軽視の意味」をもつ用法であるからである。この軽視のクライの用法については1.7節で詳しく見ていく。

1.3. 最上の用法

- (13) a. 彼女ほど頭のいい子はいない。
- b. 彼女くらい頭のいい子はいない。

- (14) a. 人前で笑われることほど恥ずかしいことはない。
- b. 人前で笑われることくらい恥ずかしいことはない。

(13)や(14)の例のように「名詞○○{ホド/クライ}~な(名詞)もの or ことはない」とい

う形で最上の意味をあらわすものを「最上の用法」と呼ぶことにする。この用法においては、ホド、クライ、どちらの場合も容認が可能であるため、両方とも使用可能だと考えられる。しかし、細かく見ていくと、(13a)の例文では、ホドが「彼女」を強める役割をしているのに対して、(13b)のクライは同程度の意味、つまり「彼女くらい頭のいい子」というのは「彼女と同じくらい頭のいい子」という意味しか持つことができない。どちらの例文も最上の意味としては同じであるが、ニュアンスに性格の違いが出ている。では、次の例文を見てほしい。

- (15) a. 今日ほど天気の良い日はない。
b. 今日くらい天気の良い日はない。

- (16) a. これほど天気の良い日はない。
b.? これくらい天気の良い日はない。

どちらも最上の用法の例文である。(16)は(15)の例文の「今日」を「これ」に変えたものだが、(16)ではクライを使用した例文の容認が不可能である。これは、「今日と同じくらい天気の良い日」と言うことが出来るのに対して、(16b)のように指示代名詞これを使った場合は、「これと同じくらい天気の良い日??」となり、本来のこの意味との違いが生じるため使用ができないわけではないが、容認しがたくなると考えられる。つまり、「これほど」の「これ」は何かものを指し示しているわけではなく「こんなにも」という、程度を強調するために使用されているため、強調の意味を持たないクライを使用すると違和感が生じるのである。同じような例文であっても(15)ではクライの使用が可能なのは、強調の意味としてではなく、「今日と同じくらい」の同程度の意味としても意味が通じるためだと考えられる。(この、指示代名詞「これ」に接続した形については3節でくわしく見ていく。)また、この最上の用法は述部の動詞は否定形になる。

1.4. 同程度の用法

前節では、「～な〇〇はない」という最上の用法を見たが、最上の用法においては、指示代名詞に接続した形を除き、ホド、クライどちらも使用できるが、強調の意味を持つホドと、意味を持たないクライでは使用した際に性格の違いが見られることがわかった。

本節では「同程度の用法」について見ていく。ホドは強調、クライは同程度、軽視の性格を持ち、その性格に反する文のときはその使用が不可能であるという仮説に基づいて考えると、同程度の用法ではホドの使用に制限が加わると予想される。いくつか例文を見てみよう。

- (17) a. ?彼ほど英語が話せたらいいな。
b. 彼くらい英語が話せたらいいな。

(17a,b)は、「英語が彼と同じ程度(彼のように、彼みたいに)話せたら」という意味をあらわす同程度の用法の文である。この文は「彼」に対して強調の意味が含まれていないため、(17a)のようにホドを使った文に違和感が感じられる。しかし、次の例文ではどうだろうか。

- (18) a. 彼ほど英語が話せるようになるにはあと一年はかかる。
b. 彼くらい英語が話せるようになるにはあと一年はかかる。

(18)ではホドの使用が可能である。これは、文において強調の意味合いがあるかどうか、つまりこの文の場合、「彼と同程度英語が話せること」が話し手にとってどういうことか、文が強調の意味を含んでいるかいないかの違いによるものであると考えられる。つまり(17a)においては、話し手にとって「彼と同程度英語が話せること」がすごいことであるということ、つまり「彼の英語の能力のすごさ」をその文から判断しがたいのであり、一方(18a)は、彼と同程度英語が話せるようになるには一年要するということから、「彼の英語の能力のすごさ」がその文脈からわかり、強調の意味のホドの使用が容認しやすくなっているのである。この場合でもクライの使用ができるのは、「彼と同じくらい英語が話せるようになるにはあと一年かかる。」と同程度の意味としても容認できるためである。

続いて次の例を見てほしい。

- (19) a. *カッコウはカラスほど大きい。
b. カッコウはカラスくらい大きい。

- (20) a. カッコウは鷹ほど大きくない。
b.* カッコウは鷹くらい大きくない。

(19)の例文は述部が肯定、(20)の例文は述部が否定となっていることに注目してほしい。まず(19)から見ると、ホドが使用不可でクライが使用可能である。これは「カッコウとカラスの大きさが同じ程度だ」という同程度の用法であるからだと考えられる。(20)は(19)と似ているが、その述部が否定の形をしており、それによってクライに使用制限が生じている。よって、(20)は同程度の用法がなにか変化したものだと考えられる。「カッコウとカラスの大きさが同じ」と言うことはできる。しかし、「カッコウと鷹

の大きくなさが同じ」とは言うことができない。つまり、同程度をあらわすとき、否定形は通常使うことができないということから、(20b)が容認できないのは同程度の用法ではないからだといえる。一方(20a)は、ただ「カッコウが鷹よりも小さい」という情報に加えて、「鷹の大きさの程度のすごさ」の意味が文に含まれている。もし、カッコウが鷹に比べ小さいことをあらわしたいのであれば「カッコウは鷹より大きくない。」で充分である。それを「鷹ほど大きくない」に変化させることによって、そこには強調の性格が加わり、「カッコウが大きいにしても鷹まではない」という、鷹の大きさの程度が強められた文になるのである。

上で、同程度の用法では述部に否定形が表れないということを述べた。このことに関しては、田窪・金水・木村(1991:89)が、強調の用法でホドを使用した文において述部が通常否定形になることを指摘している。しかしこれは、本稿の立場に立つと、述部が肯定の形である場合、同程度の用法となり、強調ホドの使用が出なくなるためだと説明できるであろう。

1.5. 非常の用法

次の例を見てほしい。

- (21) a. 彼は倒れるほど頑張った。
b. 彼は倒れるくらい頑張った。
- (22) a. 愛犬を亡くした気持ちは痛いほどよくわかる。
b. 愛犬を亡くした気持ちは痛いくらいよくわかる。

述部の「頑張った」「よくわかる」の程度を表すために、(実際はそうではないかもしれないが)「倒れる」「痛い」などの非常の状態をホド、クライの補足部分としてとる用法を「非常の用法」と呼ぶことにする。この用法においては、上のようにホド、クライのどちらも使用が可能であるが、次の例文を見てほしい。

- (23) a. 彼はよく頑張った。あまりに頑張りすぎて過労で倒れたほどだ。
b. ?彼はよく頑張った。あまりに頑張りすぎて過労で倒れたくらいだ。

(23)は、(21)の「倒れる」を「倒れた」に変え、少し語順を変化させた文である。どちらも頑張った程度をホド、クライを用いて表現したものであるが、「倒れるほど」倒れるくらいを「倒れたほど」「倒れたくらい」に変化させただけで、大きな違いが生まれる。

(21a)の文では、「彼」は「倒れてしまいそうな程度頑張った」という意味で、実際に

倒れたという事実があるかはわからない。しかし、(23a)のように過去形にすると、「彼」は「働きすぎて実際に倒れた」という事実があり、「倒れた程度も頑張った」という意味を持つ。

ここで、ホド、クライの使用不可について注目したい。(21)の、「～しそうな程度」という意味においてはどちらもスムーズに容認することができるが、(23)ではクライの容認はしがたくなり、ホドを使ったもののほうが文として落ち着く。これは(21b)が(23b)のように過去形になることで「過労で倒れる程度と同じくらい頑張った」と言うことができたものが、「過労で倒れたのと同程度頑張った??。」とは言えなくなり、つまり同程度の意味が使用できなくなったからだと考えられる。また(23a)には(21a)と比較して、彼が頑張ったことを「実際に倒れた」という事実を持って説明することで、強調の意味合いも増しているため、クライを使用することで意味のズレが大きく感じられる。

しかし、実際に補足成分の状態が事実としてなく、(21)のように「～しそうなくらい」という意味であってもクライの使用ができない場合も例外としてある。

- (24) a. 死ぬほど疲れた。
b. *死ぬくらい疲れた。

この例外については、下田(1998)は「程度が甚だしい場合にはクライが使えない」としている。(この例外については今のところ「死ぬ」という動詞にだけ当てはまると考えていい。)

1.6. 比例の用法

次の例文を見てほしい。

- (25) a. この鳥はくちばしの発色がはっきりしているほど、高く売れる。
b. *この鳥はくちばしの発色がはっきりしているくらい、高く売れる。
- (26) a. 買えば買うほどポイントがたまる。
b. *買えば買うくらいポイントがたまる。

(25)や(26)のように、動作や状態の程度が進むにつれてどうであるのかを述部で表した用法を「比例の用法」と呼ぶことにする。

この比例の用法において、ホドは使用可能だが、クライは使用することができない。文中において、「はっきりしている程度」や「買う程度」は定まっているわけではなく、常に比例の方向に変動している。よって、比例している状態に対して「同じくらい」とは言うことができず、クライの同程度としての意味では状態の程度の進行を表すことが

できないのである。
次の例を見てみよう。

(27) 食べれば食べるほど太る。

(28) *食べたら食べたほど太る。

(28)は(27)の動詞「食べる」を過去形にしたものである。どちらも比例の用法であるが、(28)ではホドの使用ができなくなっている。(27)は、「食べれば食べるにつれて...」という動作の進行を表すのに対し、(28)では「食べたらその食べた分だけ...」という動作の進行を、「食べる前」から「食べた後」の、ある2点においてとらえたものである。この違いが使用制限に関わっていると考えられる。よって、ホドは、比例の方向に変化していくもの(現在形)においては使用可能であるが、点と点における変化を示すもの(過去形)においては使用することができない。

1.7. 軽視のクライ

これまで、程度を表すホド、クライについて、ホドには強調・感嘆の意味、クライには同程度と軽視の意味がある、という仮説に基づいて、最上の用法においてはクライ、同程度の用法においてはホドに使用制限があることなどを見てきた。本節では、1.1.節の(3)で述べたようなクライの持つ軽視の意味について考えていきたい。

(29) a. あれほどの美人はなかなかいない。
b. あれくらいの美人はよく見かける。

(30) a. *それほどのことしてくれたっていいのに。
b. それくらいのことしてくれたっていいのに。

上の例文は、クライのみが使用可能である。意味としては、「何か他のことはしなくてもいいけど、その程度の少しのことしてくれて当たり前」のようになり、「それくらいのこと」とは話し手にとってはたいしたことないという軽視の意味になる。よって軽視の意味を持つクライのみが使用可能である。

(31) お茶くらい自分でいれなさい。

(31)のように、「お茶」という具体的な例で最低基準を示したものについても、話し手

にとって「お茶をいれること」が大したことではないという軽視の意味が含まれるため、軽視のクライの用法とする。

(32) a. 彼ほどの男がなぜそんなことを言ったんだろう？
b. 彼くらいの男がなぜそんなことを言ったんだろう？

どちらも文としては容認可能であるが、(32a)と(32b)には意味の違いが見られる。(32a)のように「彼ほどの男」といった場合、ホドの持つ強調の意味が影響し、「彼のような素晴らしい男」というプラスイメージが生じる。よってこの文は「彼のような素晴らしい男がなぜそんな愚かなことを言ったのだろうか？」というような意味を持つだろう。(32b)の場合には、「彼くらいの男」というのはクライの持つ軽視の意味が影響し、「彼くらいのたいしたことない男」というマイナスイメージを持つ。よって、文の含む意味は(32a)とは違い「彼のようなたいしたことない男がなんでそんな大それたことを言ったのだろうか？」のようになるだろう。

つまり、強調の意味を持つホドを使うか、軽視の意味を持つクライを使うかによって、それぞれの影響によって生じるプラス、マイナスのイメージが文の意味に違いを生むのだといえる。

2. 先行研究

ホド、クライはどちらも主に程度を表す際に用いられる助詞であり、それぞれ使用頻度が高いことがわかっている。そのために、これまででも多くの研究対象となり、様々な考察がなされてきた。ここではそのなかで本研究に関連した、ホド、クライの程度をあらわす副詞的な用法についての考察をとりあげ、紹介していく。

2.1. 佐々木(1996)

本研究においてはこれまで、程度を表す意味に加えてホドについては強調の意味が、クライについては同程度や軽視の意味があり、言い換えの可能不可能はその性格が関係しているという立場をとってきた。先行研究においても、ホド、クライが違った性格を持つことそのものは多く述べられている。佐々木(1996)はホド、クライとの言い換えについて次のような立場をとっている。

(33) クライしか使えない場合 ある事柄を例えとして示すとき。(例示)
a. 死にたいくらい悩んだんです。

- b. お茶くらい出してきてもいいのに。
- (34) 言い換え可能な場合 具体的な数字を示して分量や程度を表すとき
- a. ひとクラスに 40 人ほどの生徒がいます。
- b. ひとクラスに 40 人くらいの生徒がいます。
- (35) 両方使用可能であるが、ニュアンスに違いが生じる場合
- a. 木村先生ほどの実力者はそういない。
- b. 木村先生くらいの方ならざらにいますよ。

ただし、ホド、クライの性格の違いについては、(35)について、実力を高く評価した場合にホドが、低く評価した場合にはクライが文章に落ち着く、としか記述はなくそれぞれの持つ意味についての詳細な言及はされていない。この研究については、まだホド、クライそれぞれの意味や性格について研究の余地が見られる。また、(33)~(35)についても、大雑把な分類しかされておらず、例えば(33)の例文についても(33a)と(33b)の例文も同じ用法であるとは言えず、その用法をくわしく示す必要があると考えられる。

クライについては、「評価の最低基準にさえ達していないという相手を馬鹿にした雰囲気漂う」という、本研究でいう軽視の意味についても少し触れられている。しかしこの研究ではホド、クライどちらも使用可能なものについての考察が充分ではないため、についても説明不足であるといえる。ただし、クライに軽視の意味があること、(35)のような性格の違いが見られることなどは、本研究と立場を同じくするものであると言える。

2.2. 益岡・田窪(1992)

ホド、クライの持つ意味の違いについて、益岡・田窪(1992)は、クライは基準点、ホドは範囲の幅をそれぞれ示すとしている。詳しく見ていこう。

- (36) ちょっとしたビルディングぐらいの大きさはある巨大な茅葺の家
- (37) お絹の背丈ほど大きな山百合がたくさん咲いている。

(益岡・田窪 1992 : 393-394)

益岡・田窪(1992)の P393 には、「クライは高さの最低基準として“ちょっとしたビルディング”を引き合いに出し、同等という“程度のレベル”を示す。ホドは“その山百合はお絹の背丈に近い程度、最大限に見積もってもそれ以上はない」という高さの幅を示す。」とあり、クライについては最低程度の基準点、ホドは幅、上限を示す最高範

囲の意味があるという見方をしている。また、クライに軽視の意味が表れ、ホドに感嘆・驚嘆の意識が表れることもこのことよるとしている。また(30b)の「それくらいのことしてくれたっていいのに。」のように最低の程度を表す用法においては、ホドが使用できないことや、最上の用法においてクライが同程度の意味として使用されることが述べられおり、これは本研究と立場を同じくするものと言える。

しかし、指示代名詞に接続した場合において、「...ホド...ノニ...ホド...テモ...ホド...ナラ...ホド...モナイ/のように呼応する表現形式ではクライと置き換えることができない」とまとめられた記述がされており、まだ研究の余地が見られる。本研究ではこの指示代名詞に接続して呼応する表現形式にもそれぞれ制限が加わるという予測をたて、次の節において、指示代名詞に接続するホド、クライについて考察していきたい。

3. 指示代名詞コレ

これまでにホド、クライという程度を表す助詞について見てきたが、その例文を見ていくと、あるひとつの形が多く見られた。指示代名詞コレに接続したコレホド、コレクライという形である。本節ではホド、クライについて考える上で必要不可欠である、コレに接続した形について詳しく考察していきたい。

3.1. コレホド、コレクライの用法

次の例文を見てほしい。

- (38) a. これほど面倒くさいなら先に済ませておけばよかった。
b. これくらい面倒くさいなら先に済ませておけばよかった。
- (39) a. 今まで生きてきて、これほど笑ったのは初めてだ。
b. 今まで生きてきて、これくらい笑ったのは初めてだ。
- (40) a. どうしてこれほどおいしいのに全然売れないんだろう？
b. *どうしてこれくらいおいしいのに全然売れないんだろう？
- (41) a. 君がこれほど冷たい人だなんて思わなかった。
b. *君がこれくらい冷たいひとだなんて思わなかった。

これらの例文は全てコレを補足成分として持つ例文である。コレホド、コレクライの用

法を上(38)～(41)に分類してそれぞれ見ていきたい。

- (42) a. (38) : (AならB)
「これ{ホド/クライ}○○なら～。」の形で、述部と順接でつながっている順接タイプ。
- b. (39) : (AはB)
「これ{ホド/クライ}○○な[名詞]A + は or が、～。」の形で、[名詞]Aが、述部においてどうであるのかを示す名詞修飾タイプ。
- c. (40) : (AなのにB)
「これ{ホド/クライ}○○なのに、～。」の形で、述部と逆説でつながっている逆接タイプ。
- d. (41) : (AがBなんて!)
「[名詞]Aがこれ{ホド/クライ}○○だなんて～だ。」の形で、[名詞]Aが○○であることを強調、驚愕していることを表す感嘆タイプ。

以下、これらタイプごとにホド、クライの容認可能性についてみていく。

3.2. 順接タイプ

(43)や(44)の例文のように、述部と順接でつながっているものを「順接タイプ」と呼ぶことにする。

- (43) a. これほど寒いと、外に出たくなくなるなあ。
b. これくらい寒いと、外に出たくなくなるなあ。
- (44) a. まだ完治はしていないが、これほどしっかり歩けるなら、退院してもいいだろう。
b. まだ完治はしていないが、これくらいしっかり歩けるなら、退院してもいいだろう。

「これ{ホド/クライ}寒いのなら、外に出たくなくなる。」「これ{ホド/クライ}しっかり歩けるなら退院大丈夫だ。」など、この順接タイプではコレホド、コレクライがかかるものが述部の判断材料、もしくはそれを導く要素、という関係になっている。ホド、クライのどちらも容認可能である。しかしこのとき～ナラという接続詞を～カラに変えるとどちらも容認ができなくなる。

- (45) a. *これほど寒いから、外に出たくなくなるなあ。
b. *これくらい寒いから、外に出たくなくなるなあ。
- (46) a. *まだ完治はしていないが、これほどしっかり歩けるから、退院してもいいだろう。
b. *まだ完治はしていないが、これくらいしっかり歩けるから、退院してもいいだろう。

どちらもコレホド、コレクライが強調するものが述部の判断材料、理由であることは一緒であるにも関わらず、(45)のように～ダカラや～ノデという接続語と共起することはできない。

3.3. 名詞修飾タイプ

「これ{ホド/クライ}～な[名詞]Aは ○だ」という形でコレホド、コレクライが[名詞]に修飾し、その[名詞]Aがどうであるのかを表した用法を「名詞修飾タイプ」と呼ぶことにする。以下、この名詞修飾タイプの例文を挙げる。

- (47) a. 今までこれほど大きなチワワ見たことない。
b. 今までこれくらい大きなチワワ見たことない。
- (48) a. 最近でこれほど笑ったのは久しぶりだ。
b. 最近でこれくらい笑ったのは久しぶりだ。
- (49) a. これほどの美人はなかなかいない。
c. *これくらいの美人はなかなかいない。

この名詞修飾タイプにおいては、(47)や(49)のように「～な[名詞]はない、いない。」という最上の用法のものも多く見られる。この用法においては、ホド、クライ双方の使用が可能であるが、(49)の例文では、1.7節で見たようなクライの軽視の意味から文章にニュアンスの違いが生じている。つまり、どちらも使用可能であるが、最上の意味としてはクライよりもホドを使用することでより細かい強調の気持ちが表れる。

- (50) a. これほど泣ける映画は初めてだ。
b. これくらい泣ける映画は初めてだ。

- (51) a. これほどまでに泣ける映画は初めてだ。
b. *これくらいまでに泣ける映画は初めてだ。

(51)の用法は最上の用法であるが、マデニという語を続けることで、クライを使用した文の容認がしがたくなっている。これはマデニをつけることで強調の意味が強められ、強調の意味を持たないクライを使用すると文に意味のズレが生じるためだと考えられる。

3.4. 逆接タイプ

「これ{ホド/クライ}」が、述部と逆接でつながっているものを「逆接タイプ」と呼ぶことにする。逆接タイプの例文を見てみよう。

- (52) a. これほど謝っているのに、彼女は許してくれない。
b. *これくらい謝っているのに、彼女は許してくれない。
- (53) a. これほど簡単な問題なのに、誰もわからないの？
b. *これくらい簡単な問題なのに、誰もわからないの？

この、～ノニという逆接でつながった用法において、クライは使用することができない((52b)(53b))。(52a)の例文は、「この程度謝ったら、許してくれるだろう。(予想、予測)でも(逆接)、彼女は許してくれない。」という意味を含んだ文である。「この程度も謝っているのだから許してくれるだろう」という、話し手の予想を超えた程度をコレホドで表している。よって、程度を強調した意味合いを表現するこの逆接タイプにおいては、クライの使用ができないと考えられる。(53b)の例文も、「こんなに簡単なんだからみんなわかるよね^[予想]?でも^[逆接]誰もわからないの?」という意味を含んでいて、話し手にとって、誰もわからないとされるこの問題の簡単さの程度を「これほど簡単」と、強調のホドを用いて表している。しかし、逆接タイプにおいてもクライの使用ができるものもある。

- (54) イチゴはこれくらい甘いのに、柿は甘くない。

上のように逆接の形であっても「Aしか一方B」のように、二つのものを比較する場合は程度を強調しているとは限らないので、クライを使用しても文章の意味にズレが生じることはない。

3.5. 感嘆タイプ

「名詞がこれ{ホド/クライ} なんて、...だ。」の形で、 の程度に感嘆した気持ちを表すものを、「感嘆タイプ」と呼ぶことにする。
次の例文を見てほしい。

- (55) a. 人前で笑われることがこれほど恥ずかしいなんて。
b. *人前で笑われることがこれくらい恥ずかしいなんて。
- (56) a. ディズニーランドが平日でこれほど混んでいるとはビックリだ。
b. *ディズニーランドが平日でこれくらい混んでいるとはビックリだ。

この感嘆タイプではクライの使用ができない((55b),(56b))。これは感嘆タイプが逆接タイプのときと同じく、話し手の予想を超えて感嘆する程度を表すためだと考えられる。～トハ、～ナンテの後呼応する動詞は「知らなかった」「思わなかった」「ビックリだ」のようなものが多く、聞き手にこの述部分が容易に予想されることから、例えば「聞いてはいたが、平日のディズニーランドがこれほどとは。」のように省略した形も多く見られる。この省略した形ではクライを使用したものの容認がもっと難しくなる。(「*聞いてはいたが、平日のディズニーランドがこれくらいとは。」)

4. まとめ

これまで、ホド、クライの用法や制限について様々な例文を使ってみてきた。1.節では様々な用法についてホド、クライそれぞれの使用制限を考察した。

「数量の用法」においてはどちらも使用可能であるが、制限として「1」など最低基準の数字に接続することができないことがどちらに対してもいえる。

「最上の用法」においてはどちらの使用も可能であるが、ホドとクライでは使用したときにニュアンスの違いが表れた。これはクライの持つ同程度の性格が関係しており、それによりコレなど、特定の物を指し示さない指示代名詞に接続した場合は最上の用法においても制限が生じる。

「同程度の用法」ではクライの使用は可能だが、ホドに強調の性格があるため、その文章において話し手が感嘆の気持ちを持っているかどうかによって使用条件が決定する。その文脈から補足成分に対し強調、感嘆の意味が感じ取れる場合、クライに加えてホドの使用も容認できる。また、同程度の用法において述部は基本的に肯定形となる。

「非常の用法」では、ホドの使用は可能だが、クライに使用制限が表れた。補足成分としてとる動詞が過去形の場合はクライの使用がし難くなる。これはクライの同程度の

性格が関係しており、「～したと同程度」という言い方ができないためである。また、クライは「死ぬ」などの程度の甚だしい程度の動詞に接続することができない。

「比例の用法」では、同程度の意味であるクライの使用ができなかった。ホドについては補足部分としてとる動詞が現在形であるときのみ使用が可能であった。

1.7節ではクライの持つ軽視の意味について詳しく見た。話し手にとって大したことではないこと、また最低基準として何かを例示する際には軽視のクライが使用される。この用法においては軽視の意味を持たないホドの使用は不可能である。また、「彼」「あなた」など、人称代名詞を補足成分としてとる場合、ホド、クライどちらを使用するかによって意味に違いが見られる。これはホドの強調の性格とクライの軽視の性格が関係しており、ホドを使用した際にはプラスイメージが、クライを使用した際にはマイナスイメージが生じることがわかった。

2節では先行研究を見てきた。ホド、クライの言いかえができるもの、できないものがあること、ホドに感嘆・驚嘆の意味、クライに軽視の意味があることなどについての記述は、本研究と立場を共にするものであった。しかし、その細かい考察は見られず、特にコレなどの指示代名詞に接続する形については研究の余地が見られた。

3節では2節で指摘したような指示代名詞に接続した形についてみてきた。

3.2.節「AならB」といった順接タイプにおいてはホド、クライどちらも使用可能であったが、そのどちらに対しても～ダカラや～ノデといった接続語とは共起することはできない。

3.3.節の最上タイプではホド、クライともに使用は可能である。しかし、クライを使用した場合にはやはり同程度や軽視の性格が関係し、ホドを使用した場合に比べ最上のニュアンスがなく、ホドを使用することで細かい強調の気持ちが表現できる。特にコレ、アレなど特定の何かを指し示していない指示代名詞に接続する際はクライの使用がし難くなる。また、クライはマデニなどの強調の意味を強める役割をする助詞には接続することができない。

3.4.節「AなのにB」といった逆接タイプではクライの使用に制限が見られた。これは逆接で文が繋がることにより、文が予想を超えた程度を強調する意味になるためである。ただし、同じく逆接の形であっても「Aしか一方B」のように、二つのものを比較する場合はクライの使用も可能である。

3.5.節「AがBなんて」という感嘆タイプではホドのみが使用可能である。これも逆接タイプと同じく、話し手の感嘆や驚愕の気持ちを表す文であるため強調の意味を持たないクライは使用できないと考えられる。

謝辞

本論文の執筆にあたり、担当教官の上山あゆみ先生には、ご多忙の中、丁寧なご指導をしていただきました。心より感謝いたします。また、多くの貴重なアドバイスをいただきました九州大学言語学研究室の皆様をはじめ、本論文の完成にあたりご協力いただいたすべての方に深い謝意を表します。

参考文献

- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』くろしお出版
- 金水敏・木村英樹・田窪行則（1994）『日本語セルフ・マスターシリーズ4 - 指示詞 - 』くろしお出版
- 芳賀やすし・佐々木瑞枝・門倉正美（1996）『あいまい語辞典』東京堂出版
- 沼田善子・野田尚史（2003）『日本語のとりたて - 現代語と歴史的变化・地理的変異 - 』くろしお出版
- 高橋太郎（2005）『日本語の文法』ひつじ書房
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- グループジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版